

【昭和の歎異鈔】 180頁

広島県の能登治太郎という、世間では妙好人と言われる程のご法義を喜び、立派な行いをする同行がハワイのコナに行きましたので、コナの教会も仏教が盛んになるだろうと評判になっていたそうだが、無漏田開教使が赴任されて、ご示談に花が咲き、「いつも私ばかりが法話をしているから、今晚は皆さんの自督を聞かしてほしい」というと二十人ばかりが輪になって一人ひとりが述べている。

「わたしは仏様の仰せだから往生に間違いないと信じています、こんな悪いものでも、たとい罪業は深重なりとも必ず救うと仰るので安心しています、一念の信定まらん輩は十人は十人ながら往生ができると仰るので私も参れると思います、五劫の思案も永劫のご修行も私ひとりのためと思います、何の動作もなく救うていただくので、あら心得やすと信じています、会い難い他方に遇わして頂いたことを喜んでいきます、この儘ながら死んだらお助けと喜んでいきます」

大抵同じようなことを言っているので、開教使は言葉を覚える信仰は易いが、実地動かぬ自性が出たら梃子に合わないで泣くときがくるのだが、人間は言葉で誤魔化されても、臨終の関所は絶対に赦しませんよ。感情はハイはいと承知しても、久遠劫からの自性は平気でいる奴がいますよ。今晚帰ってゆつくり考えなさい。

カンテラ点してキビ畑のなかを夫婦で帰るとき、主人が道に座った。「お父さんどうしたの、気分でも悪いのか」「俺はどうしても合点がゆかぬ、法然上人のお弟子、三百八十余人のなかで信の座に就かれたのは、お二人を除いたらたった二人、勢至菩薩といわれる法然さまの教化を受け、阿弥陀様の化身といわれる聖人様を法友としながら、仕事片手でなく、専修専念に教化を蒙りながら開発した人がいないのに、今晚二十人の中で、たった一人わからんと言った人がいたが、残りの十九人はみな信の座に就いているとすれば、多すぎるわい。わしもどうやら怪しゅうなつたから、開教使さんのところへ聞きに行こ

うか」「お父さん、二時を過ぎていのに何を言っていますか」それから信仰が崩れはじめた。今までは自分の地金、本性、実機、逆謗の屍などは見たことはない、三毒の煩惱は往生の妨げにならない、十劫のむかしに助かっているのだと法のお手元の大願業力ばかり聞かされて、仏智満入した機受の信相などは夢にも考えていないのが第二十願の桁で、真宗の道俗の全部はこの桁に停滞して、法を眺めて死後を楽しんでいるのです。これから第二十願の法の他力、機の自力から、第十八願の法が他力で機が他力の不思議の境地に転入する果遂の誓いの上を前進しているのです。

これまでは聞けば聞くほど、法のありがたさに酔うていたが、これからは聞けば聞くほど始末のつかない劣機が照らし出さるるのです。素直に聞いたと自惚れていたものは吹きとんで、三世の諸仏に嫌われていた実機がニヨキニヨキ頭を上げてくるし、第十八願から除かれた五逆と謗法と闡提が見えてくるのです。無いものを出せというのではありません。有るものを有ると素直に見よ、それが本願の狙いの的であると教えてあげると、機を突くから異安心と排斥されて破門されたのだが、裁いている人たちや、悪口を言っている人たちは、謗法の大罪を侵していることに気がつかないのだから、永劫流転をつづけなければなりません。実機をつつんでありがたがっているのが第二十願の桁であり、光明無量に照らされた逆謗の屍と一体になったのが第十八願の桁に転入さしていたのです。その時は必死の求道であり、三定死の境地に立たなければ自力の機執は捨たらないのです。

話は反れたが、能登さんが、ありがたかった信仰も嬉しかった感情もみな消えて、見えるものは空曠の沢の辺をとほとほと迷いを重ね、群賊悪獣に追いまわされ、何を聞いても受けつけない 異学異見に狂わされているだけ、聞いたも知ったも覚えなみな話であって、自分の実機は何も聞いていない。いくら開教使の話聞いたところで、その話もお聖教も、そう書いた人の信仰で、私の心は何も受付けていない。ただ三毒五欲の煩惱は毒を吐きつつ、猛火に包まれて三悪道に転落しているではないか。これから先はどうなるのだ、これから先はどう聞いたらいののだ、導く知識はいないのか、開眼さしてくれる大徳は

いないのか。大蛇の夢を見たり、赤鬼に追い廻されている夢を見てうなされている。このままで行けば発狂する、商売などしてはられない、これほどの罪悪は何処で救われるのだ。いま無常の風に誘われたらどうなるのだと、必死になればなるほど、闍提の機は平気であるのだ。わしは馬鹿だろうか、無宿善だろうか、無神経だろうか、このままでは人世受生の甲斐がない、日本に帰ってご真影様にお参りし、勸学さんを歴訪して開発する道を聞かしていただくこうと、旅券を下付してもらって、いよいよ出発のとき、お仏殿に跪いて合掌し、私は今まで同行顔をして他人に法話までしていましたが、ひとたび崩れたら総崩れ、何れの行もおよび難い身で、ご教化をならべて覚えて合点してただけで、私の信仰になつていないから、みな逃げてしまいました。実機は猛火につつまれて墮ちていかねばなりませんから、日本に帰り、御本山に参詣し、和上方にご教化を蒙つてまいりますから、私の留守中、家内や子供をよろしくお願いいたしますと泣き崩れましたとき、能登よい、お前は私を置いて帰るつもりかい、私はお前の苦惱と離れきれないぞ、という声なき声に飛び上がったとびあがった。親さま、私と離れぬ親を置き去りにして日本に行こうと思つていた私が大間違いであつた。息するままが南無阿弥陀仏、毒焰を吐いているままが南無阿弥陀仏。わたしを離れて弥陀がない、本願や行者、行者や本願、煩惱菩提無二、仏智満入、不可称不可説不可思議の信樂、あつともすつとも言えぬ味、廣大難思の大慶喜、もう日本に帰る必要はないけれども、旅券が下付してあるのだから、お礼参りに帰らしていただくこう。

生死の苦海を泣き泣き帰るのかと思つたら、光明の広海を遊覧さしていただくとは、「難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり」今までの不安苦惱はどこへ飛んだのやら、もう一度煩悶をしてみようとしても、腹の底からこみ上げる慶び、寝ても覚めても離れなかつた煩惱と仏智の不思議が一体になつたのだから、憶念の心常にして仏恩報ずる思いありで、称名相続に絶え間がない。変わったも変わった、心境の大変化、鬼が仏に変わったのだから、生死の苦海のままが光明の広海とは、この人世にこれほどの大慶喜があるうとは。これほどの大変化がありますからお聞きください

いよ。変わらないのは信仰しんこうが徹底てつていしていないからです。